鉄砲洲神社　論語素読　解説

（平成 23 年 7 月 1 日）

泰伯第八

1　子曰く、泰伯は其れ至徳と謂うべきのみ。三たび天下を以て譲る。民 得て 称 すること無し。

孔子が言うには、泰伯は最高の徳の持ち主だと私は評価している。何度も天下を譲ったけれども、国民はその事実を知らないので、賞賛することもなかった。

周という国の国王の長男が泰伯、次男が仲雍、三男が季歴です。泰伯は非常に親孝行だったので、自分の父親が三男の息子の昌（しょう）に王位を譲りたいとひそかに思っていることが分かった時、仲雍を誘って南方の野蛮な国へ去りました。そうして季歴が王位を継いで、次にその息子の昌が王になりました。

普通であれば長男が王位を継ぐのにもかかわらず、自分の父親の意を尊重して、誰にも分からないようにそっと南方に下った。国民に知られると自分が賞賛され、父親は非難されるかもしれないので、国民に分からないようにそっと王位を譲ったが為に、国民には見えなかった。最高の徳というものは、誰にも知られずそっとやるのが一番良いということで、孔子はそれを誉めたのです。

昌が後の文王です。その子供が武王で、殷の紂王を滅ぼして天下統一を果たしました。これは辿ってみると、泰伯が父親の意を尊重し身を捨てて、昌が王位に就くように段取りをしたからであるから、殷を滅ぼして天下統一を果たした周の基であると、孔子は泰伯の行為を評価しています。

人様に何かしてさし上げる時は、誰にも分からないようにそっとやって、徳を積むのがよいと思います。なかなか難しいことだと思いますが、チャレンジしてもよいのかなという氣がいたします。

今の時代を見てみると、内閣総理大臣が次の総理大臣を決めるにあたって代表選挙をしてみたり、ペテン師呼ばわりされるような密室談義があったりと、泰伯の頃と比べると格段にレベルが違うと感じます。

東京電力は清水社長が降りて新しい社長になりました。この社長交代劇は、＜固い意志をもって天下を譲る＞という部分で考えると、なかなか論語の文章のようにはいかないと

思います。無理やり引きずり降ろそうとしても降ろされない菅さんもいるし、さっさと譲ってしまって次の人という例もあります。

2　子曰く、恭にして礼無ければ、則ち労す。慎にして礼無ければ、則ち葸る。勇にして礼無ければ、則ち乱す。直にして礼無ければ、則ち絞す。君子 親に篤ければ、則ち民 仁に興る。故舊 遺れざれば、則ち民 偸からず。

この論語も自分自身に当てはめて考えればよろしいのですが、なかなか難しい話ばかりです。

丁寧なだけで礼を知らないと、苦労ばかりで疲れがたまるばかりである。控えめばかりで礼がなければ、くよくよ心配して縮こまってしまうだけだ。勇氣はあるけれども礼がなければ、乱暴者になる。真っ正直なだけで礼がなければ、辛辣な者になっていく。

君子が情に篤ければ、国民は仁という徳に目覚めるものだ。昔の友人を忘れなければ、国民は薄情にはならない。

ご自分で氣になる言葉があると思います。恭（丁寧）・慎（控えめ）・勇（勇氣）・直（率直）・親（情）に篤い・故舊（昔の友人）を忘れない・・・といったひとつひとつの言葉を見ると、皆さん何かしら思いがあると思います。

私の学生時代からの友人で、心身統一合氣道の先生がいました。毎月、東京から群馬に合氣道を教えに来てくれました。その友人が亡くなった時、ご遺体が一週間安置されました。私はその間、毎日毎日ご自宅に伺って手を合わせました。そうしましたら、心が軽くなったことを思い出しました。後日談ですが、奥様に伺いましたら、「後のことは、深澤に頼め」と言い残していたそうで、その遺言通り私も色々とお手伝いをさせて戴きました。

3　曾子 疾有り。門弟子を召して曰く、予が足を啓け。予が手を啓け。詩に云う、戦戦兢兢として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如しと。而今にして後、吾 免るることを知るかな、小子と。

曾子が病氣になりました。弟子たちを呼んで言いました。

布団を捲って私の足を見なさい。私の手をよく見なさい。詩経の言葉のように、恐る恐る底知れぬ淵を臨むように、薄い氷の上をそっと渡るように、私は今まで自分の身体を扱ってきた。今日から後は、こういう心遣いはいらなくなった。なぜならば私はこれで死ぬ

から、私の身体を親に返すことができる。そうではないかね、おまえたちよ。

　親から貰った身体だから、傷つけないように大事に守る。これは親孝行のつもりでやっているのだ・・・今の時代、こういう人はあまり聞いた事がありません。曽子のこういう氣持ちはいつ頃の時代から消えたのか、又は、曽子が珍しい人だったのだろうか、と思います。

　残念ながら今は、子供が親を殺したり親が子供を殺すようなニュースが頻繁に流れる時代です。それはどうもお金が絡んでいる話ばかりです。そろそろお金を中心にして回っている世の中が行き詰まって、新しい何かが生まれてこなければいけないのかなと思います。その時には曽子のような考え方も必要になるのだろうと感じます。